13
2059

13
へ
門
狩
巻

俳諧の宇武宗瀛よりも教を乞ひ
薪樵駅の校北の屋ゝのつゞれの雅を学ばざらん。亦是ハ俳諧の
三昧ならん。所柴が往古より再度世遍を
発一。春の盆の一連を写し置しよう。雅とゝく給とゝく。あらざる紙
狐と一。閑ぎを遺感と生。世人さの刻みと。書色三頭歌とも。
初より初集をめさ[是]が。僥倖みの時よかあら次編と先と墨るれバ。
連衆よ生を捲紙集ゟ。予ハ授升と命せ[世]ゝと書房が需。急ゟ者ゟ
史被ゟ改ん暇ざれゟく。唯ヂ修ハ捧とゟせバ必兼編とぞゟゟゝ

慶應元初夏稿
同二寅春発行

粋興両連一個

弄月亭有人識

旅人岡七新
堅田の雁八

音羽の左十

獵人傳三郎

月の輪於熊

嘯二編上之巻

東都　春廻家幾久輯
　　弄月亭有人校合

浜辺黒水記

若火後家俳茶屋

男「いつふる雨ぞ一向の御ぶさたで余ほどいかが減ふるやうすはしょもんる者ふかゞ
男「支度して待とと云ッて呉るのも先ず御よろこびやうだが酒よ
酢く御ひやうて呉ろと云て呉る御客
場うで連く降て降さかる様でもふる人さうと思ふのよ

なりとも申ませう　女「もしおかゝさんがよろこいつそ
歩行方が知れて居ござうもしれ
ませうと云ますれど　男「年比あつて云ますれど
ずくにも成体が知れべいつが　女「二成程
とかいありませんョ　男「ひよんと途中でおわぬ沙汰が有て
もみもわぬそも　女「ハイ入ッて迫をみ
ずつともさうとつゝらるものかな　男「まもさうぢや
うち茶みさうが有ものと　女「ハイ男ハ

年の比廿七八歳縞の着物
ゟ廿二三と見ゆる女
着物の小紋み白縞縞の
美さ紋付の羽織を
冠りかの八右ハ衛門と名を
源き中みそ絵の六尋の処の

女のあるじがある道と従って新潟から二人連で見物なし
推谷稲荷の下海岸より絵堂善光寺明神様へ
かけしあり女「モシ宗次さん大きな雪のぢやアありませんか 男「モウ
九月も末ぞのゆへ里と遠ッて山中女の身に入ッては寒いにちがいぐ
女「夏の暑さでも夜のうちは絵の今夜ハ寒いのだ子 男「そうさふのも
なくなり月霽晴れてあかく夜月が出たの 女「あんずる乳縁の
ところへ出でると夜ハ絵のうへに出ておいらが子 男「夜ハ越後と絵のの
浅明神様と出でゆきモウ半里の一里足らずで絵さんから
越ハ砂丘にお宿があるから其人連でて今夜ハ泊らう 女「そん
なら夜が明けて見たら明神様でござりませう 男「此寺ハ御ざ
きうりさ処ぞ 女「モト女ハどうらなし足は御縁の宮へ参詣」
山中女の細き茶の木の根まで行った時がとウンころり ああ横
女「アイサし 男「アレあぶない怪我でもしやアしないか 女「イエ怪我ハ仕」
ませんがあんまり歩いて我が足の様がアイタし 男「横がおかしくそのハ
困ッたでござりませう 女「きつくも足へきてそのせんが痛んで
きついくつしますに 男「ドレ己が背と押てやらうマアそのまへ入るが

くと答えるので肩へ手を掛け神輿を上げ差
らをく宿次へ掛七掛ておいでさうと男「ざう
もうかと七掛ておいでさうと男「ざう
ござりやせんが体にかまひやせん
ともち
行切ふ分抱かまへ宿次の新成駕籠
男「コレ約束通りのごせ「妻人ござるとあ
う男「ナニ約束通りの事とは何ぐ
の古町でおかみやとの仰くは格別の
丁うこの丁の女郎でもあるところ
ござりやせんの男「ナニ約束通りの事とは云
わぬ人物をかまへ八百八浦を知るあの幸作と云
奉旦右の成行ふ故ござりやせんの
みさんたのお乳の事でござりやせんの男「ナニ
さのご己も七のの時分にしてこの
めて新潟へ入ってまさの去年のま
水あのふが難人あそこさのんしゃ
すまるうまでが此子のの父上と
一ツだに書ご事まうあのこと

なんいぜん
生是以前の名ふあふ吉兵衛のうちて二ツ星紋の木仕合
みち後
み袖振ようで下ツそ着さ史雅が附ようず半ものみ知ぬ
ごみ
ど成義夫源家一晩揚ようが姫ようの為ぬく揚屋の縁
せん
みの世ろ又永禄ねが出来ようみ長ようのも長う夏史ようの
ぎ
伽羅ゞ薫光ちふみあるとみてくも史七俗ようふどんなちゞ急ぐ事
とちくも二人居ろのを楽ーようふ連て逃の逃されどこれのまゝの
いあろうこれが方ゞ気のあゞ本「ござ程とふ客海をびおまくいの
あろうくお呉の久「兵衛へでどうまるものち祝兄弟を持ござ
のゞ女「まもぐ嬉ようどぞうもござ悪さ男の縁切ふ横の痛さも
打寝ござまろう分て泊ようーもかまようみ俗ろ楼の縁男「ヨ
あの湯ハモウありざろやァあひの外こまくあめさよハ御ぢ
て呉ンね女「アイちのと娘ようでぞのまござト箱をおくくござ上
長ゞ宗次ハ相性を笠之結びお死がるとそれみの根を除ま
のろをめて果ろみとうくてやりくふ一二丁もまくーが
又りや横のさーこまようふ事ちるのろを外施ま男「まよ客込ろう
女「アイぞうも客込でありませんがござまふよ休むあへまりません

うす　男「休へまつて休むで呉ねへか一杯家の茶屋まで行つて
らうが安めて呉ねへか　女「その様の茶屋とハまだ余程遠
久　男「ナニそれ二三丁だ　女「夫ぢやアどうとしておわしてお
ます　男「ナニこゝまで来ねへとも死ぬ様な疝気の差込
てよ　女「それでも家迄帰るまでかまふ事ハねへ　男「ヤレ
門へ着た　男「ヤレ〳〵嬉しや茶屋を見付けた　女「お湯を一ツ貰つてお呉レな
さい　男「モシ〳〵ごめんなさへ　女「コリヤアお客さんでござりまし
がねへ　湯を一ツたのみ升す

たらぶ〳〵と泣くが出るやうに思ふ　男「ヲヤ〳〵
呉ねへの涙の出る程嬉しがる事ハねへ　女「ヲヤ
ちきく風を引ひて寒気がする　男「ソリヤア
間一里よりと違ひて大きにおそくなりまし
ナト　女「ヲヤそのやうに　男「ヲヤ
こゝまでお出でござりまして　女「ヲヤ
交まで　男「イヤモウ困りまする

ごぜうまつ女「イヤモウ平地ハ往ふ往ふの名代ふうの明神峠男
と遠ッてもお女中さまでかをそろくてお弁
当も喰ふそこの奴よ出ッ立ッ途中さうで
ごぜうまつ女「ヲヤまあ一体おまへ方ハごく
まつ男「往列の善光ちくまふうれいの
関の人おありうまされバほうふう
みやうまつ男「往人ハよびほうふう
生て善うまいうまつき女「成そごろ
お岐中さまとも大概きまさか二人さまモシ後ろの
さうは女人か当のあのやうふうほう往
ちやとも疲く休とお就あきらまで
ごぜうまつ女「ごうもお
ぎりまつ男「そのふうの関のさのごう
ごぜうまつ女「ふんでも業のお勤合せの
腰があのう着ごおた生列の風ほう変色い
知りまつ男「ナニ知うまの支度やノ女人ハ往来れて来う

一 新ぞう（女）「エヽ夫ゆゑアノ色を（男）「業平よりあゝ思ひ込れど源氏の今を
をんなく変き（亭）「夫りやアトンゞ（男）「新のゑ傷ふ吾でおさが来ませ
こゝふ居れバよいが（亭）「モシぜんみ参る座でござりませ（男）「ヘヘ半でござり
ますの主の思いふ新みそびのある男と（亭）「半ほゝで眼の大きゝ額
の疵のある男サ（亭）「夫りやアこゝかごふのんきせっさ不粋よ
ふ疵のある男サ（亭）「夫りやアこゝかごふのんきせっさ不粋よ
疵庵とゝ酒の上のこゝの咄ぜ（男）「名ゞ者れ宣ぶ者ぢ
一ツ盛り注ぎ来ませう（女）「おまの盃ふ
あまたび仕おお粧てゐ座のこゝぢ注ぎおくれ

（女）「まゞこゝの（男）「そりやアお細ふ御座ゐんせう
変ふ居れバあんまり切ふくべ押てもどうぞ久
ゐの事ゐゝ来ませ（亭）「かゝく参りまさ（男）「そりやアお世居ゐ一ツ参う（男）「夫ぢやアお
ゐゝ来ませ（女）「そもく
ゐゝ来ませ（男）「エヽ名ぢ者れさんまりやアお座ふ吸ゐく
夫ぢ参ゝ（亭）「モシお妻ぢ（男）「アヽ申ふ妻ぢ一ツ
おゐあされ注しゝさんまりを（亭）「アヽモシお妻ぢ（男）「者ゐりの
ゐゝ来ませ（亭）「ゐゝ新ぐ者の参ゐかりまさ

鉋を掛てぞらツ〳〵やり居（ゐ）る所へ
男「コリヤ〳〵大工殿抔（など）ときゝ出せバ
あのゞ角もい後鉋のおやうに抔ぜ
ナモシ鋸よ出来（でき）ましたか
男「ハイ〳〵もう〳〵出来ましたれ
男「ヲヽ〳〵大工殿抔ときゝ出せバ
男「ハイ〳〵もう〳〵
男「ドレ〳〵もり〳〵来ましたト火鉢の
男「エリヤ〳〵ト引張切（ひきき）
男「ヲヽ〳〵大工殿抔ときゝ出せバ
男「ハイ〳〵もう〳〵
男「ドレ〳〵もり〳〵来ましたト火鉢の

男「ヲヽ〳〵大工殿抔ときゝ出せバ
男「ハイ〳〵もう〳〵
男「ドレ〳〵もり〳〵来ましたト火鉢の
男「エリヤ〳〵ト引張切（ひきき）
男「ヲヽ〳〵大工殿抔ときゝ出せバ
男「ハイ〳〵もう〳〵
男「ドレ〳〵もり〳〵来ましたト火鉢の
男「エリヤ〳〵ト引張切（ひきき）
男「ヲヽ〳〵大工殿抔ときゝ出せバ
男「ハイ〳〵もう〳〵
男「ドレ〳〵もり〳〵来ましたト火鉢の
男「エリヤ〳〵ト引張切（ひきき）
男「ヲヽ〳〵大工殿抔ときゝ出せバ
男「ハイ〳〵もう〳〵
男「ドレ〳〵もり〳〵来ましたト火鉢の

女「大練貳圓高ハドッさうと云ふ程ろうそく消て居へ迄全ク
ろうそくの糸計ク赤さうな
お熱もよふござりし活衣を始めでぐるくと参る第のろうそく
小風呂敷の色を出ル女「そこ
とそいさく勝のえもう人間で
ゲ参さう今月うくと」此月
多「えゑ弟を連出さ来
ま上ゲるのうち手箕治を
ござるまで二三日参るのゲ
女「さうして治手の紙
多今で参あるヨト紙入ろ
ゴト出ル名揃で安クさる女「
あの元さ女「おび昼帯ハ色ゲ
火物ふみ間筆後で書みゲ
昼帯まで参ろと注生
毒気ゲ移ろく騒ゲろく湯治
君先ち後生ま

ごの灰の様子よせうま変しの体裁屋「学もさのみ
そでぶって年あるう君さえれどうぴ
うちやう湯水も呑おぞうでよご目さ体見人八百八度あと
浴衣えうべ多悪をごるーこと浴用を南み連出ーく
そ変で教ーさ教も書うう丁度七人用手「お清が酒おや
ね人えれど変重ま目で天の網迎目ねるのも新りうのぐう
止ら目ねのご世のさえ女「ま目よ盗賊あよまさ嵐毛天の毛
火後家変うこぢうき死の上の前毛天の果い物み他「墨

と御よ消てひうそのきゆうぜうも赤のうぴ前成着ぐ眉間人他「めぐ周果
火の足ッきう女「誰もる向の水毛ぴ名他「線番毛天の主人
もるー女「墨教ね人うぴこ山ゆうみ一つ毛振袖のみのもこうう
毛天の二人もあうぴ女「ぴのさナアトお未就方勘絵おーそ
列車変病気よ指の毛のドロくとふ周湯よあうる主しいのの
男が浴用の金えうんとあまみむぴた他「ヤ我やも先別の
猿人ざナ女「金がみーさ永迷ッて毛ぴ金うの主み

渡そうろう 他「エ秩父源の世良ざナアト抜ける徒利根対まで
案ハ消て一云の法火あんくこの文あり半蔀を渡ぬ
他「ろ殺元者め消やがのろ」女「ヤ大そう渡てまさやろいの
ウトのくおろ門ろう矢立ろ旅人やろ
半七ひろひろ 旅人「アそこ渡でろうまろふのろ 他「おめくい
旅人久ろ ろうしろ 旅人「ハイ 秩父人ハ ろうちゃア又
元者うとろのろ 旅「ヤろうのまハト居物書みの人玉賛史の
おろみ二人彩成足合て 他「ろうやアのぞや半紙で渡れも

そのき半門を「紙で逃さ旅人う 旅「扱そお熊の他言外
他「ろシぶと半ろうろ女「そんろうろ
ろ渡のろ先ろみおやろの命もろ渡の利益
動ろ足が秩渡み居ろ史と扱ッそ旅うろ指数ケ変み
居ようとろ「ろ伝渡の源坂ろうまろ「明神秩
ろうねろ面み矢ろんざ彩ろ中彩の絆筆屋変で斗ろ出会
ろうねおぶ運由月の指のまろ熊他二人とも命の要ッよ
覚悟ろ 他「ろのハなろうねト居物書の羅あうち

逢せべきのとよぶる所作事嘆夫へ消てくろがりの気登ひと
迹ゆくとかくしてとさとするだんまり探索春恋し一学のゆく道しが
家のぬくのは端近の二人は若男人藤の川より 旅「南無二人は
逢の恋人ト嵐人修足端らけく善悪きのとみえまんぞう
夜が噺の体みせ別二人が藤でござります 途中「撫て
藤の事は噺り悲みのきのさ恋夫とつる申すふ内でも中途
で立消ござりして部分と影と別々で乳え合る噺ざ 化粧へ不
知合ふ所が披露もござります

千歳鶴亀 春の夜 雛の鶴　艶容唄問文明
ある端安部の内でも物語人ふさし支へ関係へきっくは備入達も
出来ふる嶺り 繁ふ園ト家毫世ふ多げらもお猿老真公「
素なく新称の恋ら不不働きの多の家へ縁ら気へ珍らしいヨウチト
女を観音さまでも猛しく新蔵衣を客人を呼でする
トあるりの案内交え道々源家ふ御そや見をもつてもむかうの宮人と
筋のふちふり川しの懐好しく気前顔の物がおうで稀なる人
数いト恭り山が弘付一たる人は当りも思ふらぬ根ひあぶ宮流し

勝本撰小松

一寿斎

月が高りてうそう子「アイどうも角川急にござまし「モーそう多人の
雅吉ざう兵ごがみうそう子「イエざうもトふそくく
ある史「さっそう兵ごうふの急根がなの
急へ春ざうお暇のやうと「うんぎまも「てうとうんて

寿の重義久他

七草遊女梅

誠遊女「小松さん此袖のざんしょ
小松「ヲ柳兵ごんがお兵ごんと「兵ごうふの袖お兵ごうふの
ざんき「兵ごんまうと「うんぎまも「てうとうんて

寿の重義久他

七草遊女梅

誠遊女「小松さん此袖のざんしょ
小松「ヲ柳兵ごんがお兵ごんと「兵ごうふの袖お兵ごうふの
ざんき「兵ごんまうと「うんぎまも「てうとうんて

吟るりんざと柳兵ごんがお兵ごんと「兵ごうふ
お湯と春ズイーとうちのと吟ると
ちう高し此お湯い客様よう二ツまくのまふ「ナセ「ハテ客様
ちう七叶湯よう二ツ多イ春鳥のの船でざんきハ子「其ちう的
と客様と二人あいまると十八湯でみシまみョリ

吉和国まで他

入墨屋 愛 地獄

西天竺の鬼と尾とのふ葉愛あう
角の迎へ人うとこまでの迎みう「急ぶごく連ゆうう湯

みくに城郭のごとものあり其後の名殘歟
うがさこ山東宮あり其南麓に
神社有國玉大神のおはします
多くの人祈禱をそこに罷申
しく殺戮しそのち小人世に
絶名又入當しく死人もあり
あまり數くの大王明證あり
大宮完ふと雖ひ脇よく入當をのさまや脇を
[illegible]

[illegible]
始めの如くあり此邊の脇が抱入當の
經營せよとのこと東人早尾
ろくみ思慮たゆやくとくこと
早くうれバゲチやくとこそ
ゆゆしく齒齦の音ありし脇が
憂國ふ重んとおりへべろりと
目を見ーる憂くこの物
梅見　錦絵　小判

鑑賞作品

紙屋紙の上人亀井戸へ梅見
処へ参詣の帰りー
浮文ー
外の品ー一枚十銭ニ枚つ
ぶり売が物価後の高ぶれ小判一枚につき
「まへ又ー
でぶりー風俗

二編上之巻了

辻君　冬籠　色がある
る町人の源右でぶりー
とうまく口を開ひー
屋風俗遠目ー
み髪結りの自慢をー
でぶりー
ー丁度ー

でござりますハ子久しく病気でありますので此節ハ前の呈も取極
まりましてござります 源「其の呈ハ種類でもござりましたらう
八百「此方も目利ハしませんや ア辻番の喪家で御割鍋とやらく居
やしく 源「さうサ辻番の提灯で漬物やの裏ざとのよかござ 八百「
中々根さんでも風呂屋の湯ハ湯屋で居た揚る者も引る
膏薬を付て渡イで居の拾出新も天窓も支配サ東ふ
裏の露くッさの人中も〻垂ッぷ ほのとがくされてえん名宛が此も
居ました 源「さう人に見ゐ宛があつて参らぬあぶれ人是でも突ッ

込むと大怪我をする 「其れハ突込でござりまするのでござり
ます 源さ 錢納とも参りさの 八百「其れハ土産の中紀の新屋の寄
ござりまてござりまする飯や菓子雑煮其のく立て他ッさの路地
あの女郎運とござとの嬉サ 源「さん子の子の鮭ふ よう立てよく
種あの女郎是へねへ居ざ 八百「源治さんハつらうねへからいねあへ
ありよふのいろがあるとのまくてござりまし 源「ハア是
とよんのいよの子のりよ自己ハ大きの腰ちぢんさ
源治 引眉毛 力持
三福 梳 櫛 他

ある酒屋の番方人力車夫方杯の番附よりも大関う関脇
ここにもくね男山雄を好きつくとあるく眉毛う薄く多く長く
ぐら且つ更に婦の如人来うる毎朝ら」角毛をそって世ひまくう
ぐ又日よりぐく婦のうち人来うる更に婦が妻のよう毛し
ど文字ぐうろう濃の源兵衛濃で世ひ「一番あく
らくあまう多ぐ愛いぐとあぐ今日人さ二十の車力せら
ふうひ「二番うらいん」ア七十貫目のくう人さ一ま
円あろ 具月番 今番
功助 泳舵

番目の番附よりも大関う関脇
番目者おりしがいかの物と手とらくみ
み女更深夜の事とおりしが私あの七番後婦よ主命し
ど女のおひとやうで私多ぐく等一ろ仕事をらう
物且強針いの婦女一多のの人よぐ且つ入ると強の
破且より月あろのめたをよみ春女とう婦女とうみそろく云
ある者のもお且ど一向もあいお七ろのあイ者二人「まのく
なる 今番成杯ぐぐう不月番まるみぐぐう絵一番の

幾久
彼岸

そばとうふうら猴のこと我今年ごろ今と
猴をもとよりおもしろき絵のかけものとよ
捨書よりも百倍おもしろくそうぞう猴の
ことなれ今ふたりの人の咄をも書湯より
高うかみ女房ども猴が出のみもしめう
と早く宅へ帰り筆とりもも絵そうー猿をねた
それバかりかおもしろひあてことどく
猴が遠く故郷の山のうみ

ここのうちも女房猴が猴ものうへ今我れ
とも申もおく痛ことその間書もかゝれバ
書ものまゝ人へ伝ゆゑ此絵のやうな咄をも
書ませんでおくれ

酔画坊北

富家の子息俳諧の人をそ加業ゆゑ一ト稽古

まを「支かるぜ」を「ちくしの者とだそよ春くるうまくぶ松の
者べ春そどまくありまを
大名　猪牙舟　春の雨　船の流屋文能
あるお大名ぶをの内ささ
のの小さの春をもぞんぜぬ文四人春雨みど
みも出ることやう能ハまさ人の
を綴さうとあの云ふうその性古能夜の明さやうみ
能よいさ一人を連山ぶトやう

中被猪牙舟で来らうと内く仕掛ぬ松のお供び
みくれの変がのこへ演舞
ふくりで色それがある附仕方人ふ若辺よ人ふれ初例
の松どの名や若ふ服装みくりつき七変もお重び
桂でまみつまふくらくまる外多方まぐ外くみ
変もござ並べトヤ上るみ大ふ方がやてと狂ふぐう
松よかくって来れハ七変ふ
どやうう出上とそもお桂ちけつまふく待ても矢う

まろうと人トいふ又ゑでどごろまたは表のゑどやうな所
みへるでまらう
夜桜　宿屋　楽阿弥作
或人老卿をつまで夕方ようち若き人夜桜を見ありー
遠国者史肝成法ーてあるうち伸の丁へおくらんが
出て来うち成ふた「モシあの中よ茶のむごうまうさ
うト云バ「イヤ〳〵自己の八宿
うさト云て「きさまの宿ゑを抱てまるさるのう「イヤサ於

屋の主人亭主の宿屋トいふ
トうとおのひまるト浴くふ伸の丁のお
おうらんが出く来うち成ふた「モシ大さうふ出て来ーうが
ゑで
物成来うのでぞうまた「あの見へ乃中成まるのサ「ハテ
くらん
蔵ゐ有自己」あへ物下着で乃中へ出来ぬ
多芸ゑ
衆仙人　衆西南ぬ
おくう先
仏義善を四人人達のうち猿二人朱ふ主お徳さんおまへの
あるふ
句着い雑つゑまうさ我人湯ゑふこのう主と宿後のへもうふ

あのでいりまセヲ」「ナニ桂の船頭さんのくれるのだ」
「ハイ家機番でござります」「ヤ家機番でござりますヲ
矢ッ張家機番でございますヲ機くへ村田の紙つみますヲ
「さうでございますかそれもよしたくと教てまるでと
私どもへ「ちと私よりよい家の
他人がよいと申ますゆゑ平くアノ家ございます」
より市村の機がよい度ございますヲ」「おつるさん機数の事をご
ざいますか「イエ来ない事の方がよいと云ッてく来

まして「楽屋へ西の方が宜ございますヲ」「私サモシ絵でも
アノ中条へ機がよいのでございますヲ」「さうヨあれハ隣家
南向がかつさ小供も事次第よく
とつくこと「アレサおぐあつョ物」をまるとも
「そんでもッイ」「アレサ東西く」
紺地の梅 おうめ 暖簾の額 紺波さん系 他
同家 橋をこみ名ざる丸太家 逃く同の雪もる程の梁間
舞くおうめの雪我も水もる雪我ハおうめの雪我

せうこと云ふ事のあるが外のおもちやびあくお出入の種屋ようの柚の汁種物寒中納豆などを売歩行商人の声にて

その売るやうすこぶる滑稽にして誰も笑はぬ者なし

今朝よふみやまるおもちやの面大名の絵紙主の処や「さあべとよ

おもちや制しそおまへへもぜひ絵紙主の処や「さあべとよ

あるひは柚のかをりをいのでおもちやの鼻がぴくぴくする

やうなれば主人「ヲヽ柑子主もおよこせ」と云ふ

主額も掻ながら「ハテ今日はあまりの寒さにかじかんで

筆もあるがまへぐらの処で紙でもあらう」

のうが東京征伐の時橋派の

き来く彼是で別まで知ぐ号の口絵

一晩主もくんで居うまさ史

石よりのさのサそそで氷人石と書さのサ

氷人石　橋　附言

トキ二先生濁酒天神の境内の氷人石とそあら

紀州の俗文稿紙

知せねバお仙ざ人ゞ氷ツこみさうなものざらうの方「十二廿氷もあるハ理がある氷品
とゝなせんのこ水ざ

来雅　家主　初午

初午の大祭礼よまる都住吉の亜を「コノ都住吉ハ絶
舎の人ごの「さうヨ浦舎ハ都住吉の如亜ーとの人ハ
「おまへ都住吉が力みまするせ花さまものゝ又一統ハ都住
家のやうな狂ごともがハそうざらう「さまでそれハ

いく女化

自己も知らぬが手柄なこと東雅との人ハをこれハ知まる
都の人云うのハ大屋さまよまる
屋のやう畏生の取人誰で湯屋
へ参ル「モシ大屋様あがまし
とのゝ義理や都住吉が
子供「おかゝさ誰でもぬくのでまらう

初雁　湯屋　義者　菊の屋都安化

湯あがりの宵まうる林の義ト中七名ハあんこ

柳橋辺でござりまする柳湯と申湯屋がござりまする正月松のとれも
内のものでござりまする男湯女湯この外に会所まで申しまして船人
二人だろう参りまして幸い「お行さんもめでた」「ヨヤお幸
ちゃんお目出度ト云ふ一礼をのべ「トキニ此ろ流の噺
しで出まして「アあのあい大そう大きな
新つきやく居るね」「そうされへ居やさんみたゞ
するとサゾうつで天上の新紙してあるヨその振り賓の
日の注ぎ口天のやうな新紙してまでおまつみ已前ござり

カトいふじろの絣の和女ゆく居る史大きな服を着「あま
そんまやのおんが容姿が異宮がようござりまくらかげんみ
ろ庵よおー此方ゆ庚申さるづつてかるヨ「アンノ八十八
夜のこまみ「ここの爺ゆ豆ござ子あの年ハ女房ゆさ
の振よト二人云あうそひまして史「生ゝおまつみるさい
初春ゆそうろうんのこそでござりまして生ゝお静みく〳〵モシ
おかゝさんお迎入ゆ女人さぬぐ下ござ子ね人ニらうも明の方が
あうまさノサクござりまするのは自分〳〵

山岡　兵人　平二の山　奥の深谷人此
吉田屋治郎とのくる者源川の船頭ふみふみて
永代橋の下まで来りしが夜と共に雨の降十七八の
納豆南へ参とだろうふ乗込一ぐ支とろるよう客次第一ヲイ
八ツ丸ぐぢ開けて呉れ人八ヘイとだうふふ呉れ寿せ
さもち支へ引あげて呉べ新うち娘ぞ今死入し
だろうとう人分うちみつぐもあろうざ豆どろかるいね
義理更人の数一く呉よと数回のものをけ方ハ制一らめ

者「こうものみとみつ一下ち下ろ此のよふ死らべ教一ものよう
さうだ
相後ぐ屋くこみのうち及ま方ぐ
まで
ちう
もおかみのうまそうト世ふ牡蛎
もぶ
それ一他一什をお始ぐ
者「支ぐや雨が新ろそ人の世
と
結よう支ぐとらんのづくさふみ支で
それ
分を投うと云ふさうのう
ふん
支ぐうものもふ細かれ人角もぐ
それ
支ふーても八ツ丸の雨ぞ人ちぐろく
八「さあうサれ人と高ぐし考人ぐぐり

そうの毛がごそごそまだら交の親父
丸づくでござりまする一疋ヤア一番ござりまして居ますと
支よう伴の奥に居人のようまるくとあぐらをかいて
さあおまえ頂戴致しそうくと云ながら奥
の座敷を片付ける程なく善次伴の猿を連
座敷へ通しかの猿の猿曳に向ひ田舎
がんどの亮助でも業平さんでも最早
それとは見えず最う支よりあの通り
附合ながら「ホンニまア経営もあまりでも遅のお
ぢちうどござるの
女中にも気毒ようの事でも御座りまする猿曳の
一疋み業のおかげであまり
丁寧過る処「おとっさんぞうござるのご
奥のお客が御機嫌を斗きりさげちらうと
二歩の金でほん十両あるので
おどしして金をとるのごト笑て猿
お返しして手綱を善次郎へ渡す

のどう長閑さや
わが
鉦のなる
と
仰ても
神
ぬ
若幾

一六文高

裏ぼう逃せ——み形とも外の船又沖へ逃て行
「コリヤ狼あのお客様をせ逃しちやアならねへ
いや大金持お客とものこと
をまつこの船まで逃うみそと富士見ん
ハはゝみごう「コリヤさん敵ぬきの
爺のやうな沖へ逃つめそ人ときうが
よみまべとの人やうな海敵ぬきとと
捨てどたーど敵ぢまるみとあ
舟クワワとたろうみも逃とそ
逃まきト敵多の船逃うみ
ト ちみ逃とまーが此見へ
富士のうへ「ヤア お舟ぶらし

あだらへ笑さうまべ「ヤア 親仁が
の船敵新棒ちぶうをらぐ
舟クワワとたろうみも逃とそ
逃まきト敵多の船逃うみ
ト ちみ逃とまーが此見へ海生の十八日みぐまのう
うまべ ぬうも ろうねもさうぶを逃まる
富士のうへ「ヤア お舟ぶらし

「ヤア富士のうくふ長らアハアハ
うぞお前様お久しぶり
「お家こまうく最中柳のお清水
うまれさこらの素の清ぶ
大阪さまのおうげドく
猿う愛よ年人助さる両
のかぶでーく清水の記念う楊の

ウト一ツ魚へつゞきさうぐゝと申しまゝ
魚の申しまゝとこそなく候ふ
ゑんき
ゐろ乳のさつくナニ言ひやア一ツ魚のいもうとぐでも
申しまゝとうぐゝ七八人のあとをつゝさうまゝ
うろ給さくゝ神奈さゝとうぐゝとの
ふるおそ候ざ先別途に
さうりさのぐ様でおめへ砂とうぐゝわへ候まゝ
うう給ンがおあのこ候あげ奉の助おとうぐゝ
の助六がありぐゝ「そーもおのへ
「ありう今年ん俗気で去年よ様が
年さのぐ「それでもよゝ助六いあん
あのうがあるめう清水の新蔵の
助の出会に宿とまさうのうまを候
帝ゝ「ナニ向ゝ」がのゝ泥の同今ヨ「
トヨ「あゝ組お家ん組ゝ下つる人
ゐのの「ゆのさくい云ッゝゆのさう

子迎ひに来て山谷の子ろくさんもう寝まさうに清水の舞
が手先の方へ来てやらう手先のろうろ眼で見ろヱヽかん
ろくろくまさく仕舞さ「コウあんまりひどい悪くじやァなんの「ヱヽ
女房のが寝ッてかろうと一緒にひろい出まくまわれば「モシ此今ヱ
「女房と上総が浮気みえるお座敷さ「支度やァ見と呉
みさるの人「さうヨあんまり自己が悪るしく「ぞう喜ほさ
「額やへ春麦を寝るのご

嘶二編巻之下

若兒　達磨　津ゞに一　柳亭種彦紀

一中無世のたまこの名残び大あくび成も「アヽ太勝出るさ
向ふ待の桜も盛でありうチト見ゑもお話はあめぶが
咲かぬ間あいたし桜へてき耳さえ附て居るへまう見も
をえを、三法の音を咲さへあるぞ。ぶし七振兼は漂ふ
みるみゞ、が「自己は眼もあり耳もあるべぞうぞ見れんが
きへのが和尚もはし象はかく附てあるさ康村鳥の

旬もその噂くらゐ興味のない金持二人とも猟銃を三ヶ
月もの大八車お家に探人形よりうそも出ないやうで
まいろ丈ほどうと相続やッと
の売ると乗ちのさまあろう小法師いくつ
いろ〳〵もぎくとたろう売
うちふりそや為くろく言う言
附やうと書と探人形一七ン貝拾
幕開 博覧雑 土用干 森の屋梅我仙

なかの巻の口源居さまでぎろはし
てけーも二月のとでぎろはして「コン
ろうねろうの何もの変物を仕よせん
さとのふ処へ本宅ろの後「今見へ移転
分ら且まるる日違さ魚のち掛の
さ魚の紙拾て事とお貝拾ぎろ
家づつのさッン掛のの大切の
出塗の幕開も今まくる亜のふ余ッ狂言さのろ「イ

ところ曼陀羅

思案 樽々 一生懸命 故人 梅通屋鶴作

或御大名でござりましたに昼の外御大酒で夫も大酒も

お好みでふくべござりましたが此御本丸御櫓に持出下屋の蒔絵の

七人猩々の七合入の大盃 なく御秘蔵にてござりましてその

お客の前へ御納戸金に是であがるでなそ手前も錫

御大盃をのと〱ござりましたが御家宝に付ひなさるのでござりませぬ

ある時つぎましに御本家様のお大盃御持様されてその

まゝ御紙小引丁に横さ幸之細大盃の御手を御手に

お手つきがあつので亀山の今元へ御前御蒔絵に御箱入

酒でこれに出来ぬ御盃に御家宝に付ひ御秘蔵になさつ

て入ッたのまし御家に此お申したのお御女中にさまと申すのが

ござりましたが幼少から上ッてをりましたが中家縁付きましたが

お手人の大酒で姫さまの夫縁と申してあ人して身代を落し

小児もござりません世帯をおりひ切て離縁つまで御一生を

中上臈と歎ひまして尋ぬらさしてをりましたが其上られて

あり「ハアそうさ和おじとその本と秋月のつよのぞ
かーおうぼ　ぶ　あごろ
み坂を　来二のよ　屋敷
ーおうぼ　ざよ
ライ代表よ坂をの中み本よ探ぐ
ーおうぼ　ぐ
人ぐぜその中の実の教ぐよろうをも
ーか　ぞ
本のやうざとりんでありう「そう
ーか
うとこって脈さ　あせくらりが一升とも一石とも十
ぞく　い
石ともあっきそぐみよう
ざく　ざく　と
ちっとぐあろう「こをサくおめ人もどうりのものぐ見ーれの

下る銭利屋しく気絶張つあそさるのんもれまう屋
ぐうぐだねえう「イヤくさうぐいねえ人ぐ落っぐうぐとう
ざく　ざく　ざく　ざく
ちさのの一石程ぐ蔵をの銭ぐ芝多腹くみ張つそ
く　れ　ドう　いん　ざく　と
まるとさいてもうれねえぐ是も附候と月の悪心銭ぐ
みう　よう　みち　ひん　もま
あへう「まぐふ偽さ雑っちのの白みの月の悪や色ちぐぐ
あうぐう　ぎ
家米あぐそのぐーい中で冷下中と是ううあの利ぐあ
えぐ　れ　ぬり
を考へくうれふ界うもひくまうとやうう白色ぐやうあ
のでもむぐみ銭で界二のよ　ぐ　ぐ　ぐ　と
なそ　金銭渦で二番ハ「ナや

そんなお酒を入れハまるめて「ヤアそこもあの
岩のそばの方へとうのでハねえか
軽業師　綾阪の絵岩雄作
「且那ハ此所へ参ッて居ますと仰ッしやりまし
の宅ハ素より実元へもまうしませぬが
まず子先一丁目へ参りまして
角の提灯の人をみ角から
親方が出ましてござります
まいりまして川東橋の
手ぬぐひ出ましたを見ると二丁目の

よふかの雲助の権がうめきをきいて
親方が出ましてござります
まいりまして川東橋の角を
手ぬぐひ出ましたを見ると二丁目の
滑丸金ぶー　かんざし
「エヽ御サアノおの「御とんでもみみみうんとニッ「ムム夫ッ
みうんでもまだ雁が出ましたと「エヽそれもきの
お大勝の中へまいりました「表のへやにひろく

旦「ム「おタ所くとうまっと
　　脇つれ遊郭見
　　山衣細道紀
ころ　ぞくざ
ム極月廿日今のタまぐれこむ雪ー
まま
家我甲そぶりあとー「モシ主人さんが山亜人今ちょっとお
ろそ　め　さま
でおやや御ふ見えそこでお出
ゆきぐう
のタ雪「モウシ仲なこうさん見えそー
ぐうこ新いうえ
ぐう新いうえ愛いあいをうる客「
しくま
降そのおうみ降でいあのアこの遊郭契情タ「十二時タ
ぎう　ゆうかくせいじょう
客と遊郭契情と「ヲイ今の雪の大降みで油をう遊られう
まうかくせいじょう　さまでひけ
する我郭契情とうの仕遊是ぞ田人も遊るるくく遊るの
ヤイトかタ雪と遊ろうちみトンくくとうまれば「ハテ今そる
け　どと
さ我遊ろうちみで遊郭のおうみまづまるづてもマアネ
ーき
ろ我のこもおまびおるうめトきまろうくまるうち学のうむろ
「モシ仲ちさん降グ振まっとづおうまませんう「ドレ只の降
いぎ　もち　ふ　ふ
ろうそもも南も雪あんぞのうそ
と　あ　く　ゆき　ゆ
汲附浅瓶　洗物油喜　孔明　立川流四郎作
くんつきあさかめ　あきなきのう　こうめい　たてかわりゅうしろうさく

扇夫
魯文

大幸

ぐまの叫ありみさん絨おとりて人民を多く生擒
よ強くして官勇み退けず自ら軍師孔明級物と云
のく気をせーみ数をあくもけとの
あ多あるまとお岩ど法官ーくこの途中み蒸軍沙孔明
く つ だー ん が
み私と答えれば軍ゆつらく号を考みつみを級物い堕ち
ざ も
を解く具みまども官ー数み私おりとをもいろみる
あ も
あを落ありしや「なあさんを思ひねど紙み仰て紙ろ
お ろく す き
ぎれこあるみ私とろく続ま仰ち陣一面ま供

二三ありと答えれば「支を見なる人民の縄おる附物者と
なあるさん官外と申ろ
王ろ
族物を論ると支ふ場ののあろ
者織山ふあさんとなりも者
かんぐみろしろべ「イエ附物者ろよの者もあるさ
でござろ「ナゼ「支ぐ仏ござろ
お金のお仏大悪更 附物族三国仏
お金雲い官家眠ふ大悪の縄を今要極多ト

ちん　このごろ　ーあいせ
ちんーそれ　ーあいせ
ちん　そうこん
ちん　そうこん
ちん　そうこん

嘯二編下之卷了

功阿彌幾久輯

興阿彌有人校訂

惠阿彌芳幾画圖

文玉堂全語壽梓

六年組

3年 11月